

JOINT RECITAL I

音楽は逆境でこそ輝く～6人の音楽の輝き～

2020年10月10日(土)

14:30開演(14:00開場)

洗足学園音楽大学 前田ホール

～ご挨拶～

本日は学内リサイタル講座「ジョイント・リサイタル」においていただき御礼申し上げます。洗足学園音楽大学のメインステージの前田ホールで、大学4年間の集大成の演奏を披露するために選抜学生39名による6回のジョイント・リサイタルを開催する運びとなりました。

各出演日の学生がそれぞれの思いで、プログラムや副題を決め、この日の為に準備をまいりました。専門コースの違いはあっても大きな会場で初めてのリサイタルを行う「責任と研究成果」を聴いていただければ大変な喜びとなります。出演学生が、その独自の構成と演出を競い、教員の講評審査を受けてこの舞台から巣立ち、現在は欧米各地に留学しコンクール入賞者や、国内外オーケストラ、教員、プレーヤーとして活躍する卒業生も多く、本学の講師として活躍するものもいるという喜ばしい実績を持っております。

この演奏会を基に日本の、そして世界の楽壇へと羽ばたく彼らに応援の拍手をお願いいたします。

学内リサイタル講座 教授 渡部 亨

本日は洗足学園音楽大学4年生による学内リサイタル講座「ジョイント・リサイタルI」にお越しいただき、誠にありがとうございます。

この一年は、感染症の影響もあり音楽を学ぶ身として困難となることがいくつもありました。そんな中、こうして演奏会という形で皆様の前で演奏できることを私たち一同、とてもうれしく思います。

これも支えてくださる学校関係者の方々、ご親族の皆様、学生の皆様、そして今日、この公演に足を運んでくださった皆様のお力添えのおかげと思います。そんな皆様へ感謝の気持ちを込め、今までの4年間で学んできたこと全てをお届けしたいと思います。

皆様への感謝の気持ち、そして変わらず音楽ができることへの喜びを、私たちの音楽を通してお伝えできれば幸いです。

演奏者代表 管楽器コース 小牧 茄央里

△新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐためのお願い

- ・ マスク着用の徹底、こまめな手指消毒・手洗い・咳エチケットの励行にご協力ください。
- ・ 大声や対面での会話はお控えください。
- ・ 演奏者への声援はご遠慮いただき、拍手のみとしてください。
- ・ 休憩時、終演後はスタッフが扉を開けるまでお待ちいただき、空いているドアから混雑を避けて入退場してください。
- ・ 客席内やロビーでのご飲食はお控えください。
- ・ 出演者への面会はできません。出演者への花束・プレゼントもご遠慮ください。
- ・ 万一、集団感染の発生が明らかになった際は、保健所に入場者の情報を提供する場合がございます。

Program

1. 小牧 菫央里(Flute)

Pf 渡部 有子

栃木県出身。8歳からフルートを始める。宇都宮短期大学附属高等学校音楽科卒業、同短期大学音楽科管楽器専攻卒業。現在洗足音楽大学管楽器科フルート専攻在学中。読売新聞社主催第88回読売新人演奏会出演。これまでにフルートを中村たか子、崎谷直、渡部亨各氏に師事。室内楽を渡部亨氏に師事。

A. ジョリヴェ / フルートと弦楽のための協奏曲

A. ジョリヴェの《フルートと弦楽のための協奏曲》は元々バリ音楽院の試験の課題曲として作曲された。第2次世界大戦後、1949年に作曲された曲でありながら極めて抒情性あふれる曲として知られている。

この曲は切れ目なしの単1楽章形式とする場合と4楽章と分けて考える場合があるが、ここでは単1楽章構成として書いていく。

この曲は大きく、緩-急-緩-急の4つの部分に分けられる。冒頭のアンダンテ・カンタービレは、フルートの緩やかでいて幻想的なジョリヴェ特有の渋みのきいた叙情が静かに流れる印象的な部分となっている。アタッカで続くアレグロ・スケルツァンドは、3拍子の諧謔調の部分、軽やかなフルートと伴奏との掛け合いが行われていく。次のラルゴはわずか23小節という短い小節間でありながら、今までの饒舌をふり払うように、冒頭の旋律をトゥッティで重く響かせていく。4つ目のアレグロ・リゾルトは最も長く、いくつかの要素から構成されている。ジョリヴェのフルートの楽曲の中でもよく知られる《リノスの歌》で聞き覚えのあるフレーズと似たところも出てくる。この楽章ではフルートの鮮やかで技巧的な面がとてよくみられる部分であろう。

2. 河村 真歩(Oboe)

Pf 森りか

愛知県出身。13歳からオーボエを始める。洗足学園音楽大学4年。2011～2015年NHK名古屋青少年交響楽団。第15回日本ジュニア管打楽器コンクール第1位、第6回岐阜国際音楽祭コンクール第1位、第17・18回日本ジュニア管打楽器コンクール第2位、第1回日本奏楽コンクール第2位、SAKURA JAPAN MUSIC COMPETITION 2019第1位。2013・2015・2017オーボエフェスティバルなどでソロ演奏。寺島陽介、鈴木宏子、辻功各氏に師事。室内楽を松本健司、辻功各氏に師事。J.ギンシャール、F.ルルー、各氏らのマスタークラス受講。H.シェレンベルガー氏のザハラ音楽講習会受講。

W.A. モーツァルト / オーボエ協奏曲より 1.3 楽章

W.A.モーツァルト作曲 オーボエ協奏曲ハ長調 K.314(285d)は、イタリアのベルガモ出身のザルツブルク宮廷楽団オーボエ奏者ジュゼッペ・フェルレンディスのために1777年に作曲された。楽譜は一時行方不明になり、そのまま忘れ去られてしまっていたが、1920年にモーツァルト研究家のベルンハルト・パウムガルトナーがザルツブルクのモーツァルテウム図書館で発見し、広く演奏されるようになった。

オーボエ協奏曲ハ長調を長2度高くした、ほぼ同一内容のフルート協奏曲第2番ニ長調は、フルート愛好家のド・ジャンに協奏曲を依頼された際にオーボエ協奏曲をニ長調に移調したのではないかと考えられている。

第1楽章はアペルト(はつきりと)と指示されており、明るくはつらつとしている。協奏曲風ソナタ形式で、オーケストラだけで2つの主題を演奏したのちオーボエが登場する。抒情的で優美な第2楽章を経て、快活なオーボエで第3楽章が始まる。第1主題は後に、モーツァルトのオペラ「後宮からの3拐 K.384」の中のアリアでも使われる。各楽章の最後にカデンツァが演奏されるが、モーツァルト自身の作曲したものが存在しないため、オーボエ奏者は自作したカデンツァを演奏している。本日は第1楽章、第3楽章を演奏する。

～休憩・換気～ (10分)

3. 井上 優希(Trumpet)

長野県出身。小諸高等学校音楽科卒業。現在洗足学園音楽大学に在学中。9歳からトランペットを始める。トランペットを上田仁、閻間健太、鈴木勝久の各氏に師事。

O. ケッティング / イントラダ

1935年にオランダで誕生したO.ケッティングが1958年に作曲した作品である。

この曲は無伴奏曲となっておりトランペットのみで演奏する。

冒頭に出てくるフレーズが作品全体で計3回登場するが、同じフレーズでありながら1回1回が全て違うキャラクターとなりそれぞれの役割を担っている。毎回新たな物語が始まるような前奏で物語でいうプロローグのような存在だ。

優しさ、活発さ、静けさ、といった様々な場面が登場する聞いていて飽きがこない作品となっている。

4. 鶴飼 杏(Trombone)

Pf 小松 祥子

神奈川県出身。9歳よりトロンボーンを始める。横浜創英高等学校を卒業。第2回K金管楽器コンクール高校生の部奨励賞。トロンボーンを栗田雅勝氏に師事。室内楽を小田桐寛之、府川雪野、勝俣泰各氏に師事。現在、洗足学園音楽大学4年在籍。

E. ライヒェ / 協奏曲第2番

E. REICHE(オイゲン・ライヒェ)は、1878年にドイツ、フライタールに生まれた。

音楽家の家系ではなく、木材の彫刻家や壁職人を経て音楽家になったライヒェは、1890年にペテルブルクへ移住し、そこの軍楽隊でトロンボーン奏者・作編曲家として活躍。

その活躍により、マリンスキー劇場のトロンボーン奏者となる。

ペテルブルグ音楽院の教授ヴォルコフらとトロンボーンカルテットを結成後、活発に活動した。

ヴォルコフ亡き後、ペテルブルグ音楽院の教授となり、1942年移住先のタシケントで流行病にかかり亡くなった。

ライヒェはベルリンやドレスデンの宮廷楽団に所属するトロンボーン奏者達と交流があり、最初は自分のために作曲したが、後にベルリン宮廷管弦楽団の名手パウル・ヴェッシュケに献呈したのが、今回演奏するトロンボーン協奏曲第2番である。

作曲者自身がトロンボーン奏者だけあって、トロンボーンという楽器の魅力を存分に発揮することができる曲である。

しかし、バルブトロンボーンを想定して書かれているため、1.3楽章は技巧的な見せ場が多く、スライドトロンボーンでの演奏はかなり難しい。

2楽章は他の作曲家の協奏曲とは1枚上手の美しさが魅力である。

指定テンポよりも少し遅くたっぷり歌って演奏されることも多いが、指定テンポでの演奏も旋律の流れの良い澄んだ演奏になるので、奏者の好みや吹き方によって曲の色が変わるのもこの楽章の魅力の一つである。

～休憩・換気～ (10分)

5. 秋山 圭輔 (Saxophone)

Pf 中村 真幸

東京都出身。12歳よりサクソフォンを始める。洗足学園音楽大学4年次在学中。第75回東京国際4年協会新人演奏会にて審査員賞を受賞。第1回東京国際管楽器コンクールにて第4位入賞。これまでにサクソフォンを國末貞仁氏に、室内楽を池上政人氏に師事。

A. グラズノフ / サクソフォン協奏曲

グラズノフは早熟の天才としてロシア5人組の1人であるバラキレフを唸らせ、コルサコフに紹介し弱冠15歳にしてその2人に才能を認めさせた。

歳を重ねるにつれて創作意欲は著しく減っていき、そんなグラズノフの晩年の作品がこのサクソフォン協奏曲である。

単一楽章の作品だが、大きく分けて3つの急-緩-急の古典的な協奏曲の構成となっている。

作曲上としての第1楽章では第1主題、第2主題が提示される。

そしてこの2つのモチーフが、拍子や速度を巧妙に変化させていきながら、時にカデンツァへ、そしてオーケストラとのフーガへと発展する。

変化を遂げていった2つのモチーフがさらなる発展を目紛しく展開しつつ、やがて全てのモチーフがサクソフォンとオーケストラで繊細に織り合わさっていき、最初の第1主題へと回帰し、壮大なフィナーレを迎える。

6. 加藤 可奈子 (Viola)

Pf 田尻 杏子

島根県出身。出雲北陵高等学校音楽コース卒業。9歳より出雲芸術アカデミー音楽院にてヴィオラを始める。これまでに井川晶子、生原幸太の各氏に師事する。洗足学園音楽大学にオーケストラ特待生として在学中。現在、井野邊大輔氏に師事。

R. クラーク / ヴィオラソナタ

クラークは、イギリスで活躍したヴィオラ奏者であり、女性作曲家である。そのため、クラーク作品の大部分がヴィオラを目立たせ、この楽器の表現力をうまく利用しているものになっている。

第1楽章インベトゥオーソは、ヴィオラの華麗で即興的なソロから始まり、この楽章の燃えるような特徴と、ソナタ全体を通して繰り返される主題のテーマを設定する。そしてピアノはヴィオラの狂詩的な旋律へ激しい伴奏で加わり、クライマックスへと上昇し、より柔らかく、より叙情的な中間部へと落ち着く。第2楽章ヴィヴァーチェは、ヴィオラとピアノのテクニックを駆使して、ヴィオラのミュート、右手と左手のピッチカート、バリオラージュ（開放弦と開放弦でない弦を交互に演奏する奏法）、そしてピアノのグリッサンドなどを使った遊び心のあるスケルツォである。